

平成28年度国立天文台研究集会開催報告書

平成29年 4月 7日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) のがみ だいさく		
		野上 大作 		
	所属・職	京都大学・准教授		
	電話	075-753-4288	E-mail	nogami@kusastro.kyoto-u.ac.jp
研究集会名	第7回 光赤外線天文学大学間連携ワークショップ			
開催期間	平成28年11月21日 ～ 平成28年11月22日			
開催場所	京都大学理学部セミナーハウス			
参加人数	53名			
研究集会の概要	平成23年度より始まった「大学間連携による光・赤外線天文学研究教育拠点のネットワーク構築」事業は、光学赤外線での多地点・多機能な突発天体のフォローアップ観測のネットワークを構築することを目的としています。これまでに、異なる大学、異なる専門分野が異なる研究者が連携して研究あるいは教育を進める連携観測・教育ネットワークとしてOISTER(Optical and Infrared Synergetic Telescopes for Education and Research)の体制を整備してきました。平成27年度のワークショップ同様、連携外機関の研究者や学生の皆様にもご参加いただき、OISTERや京都大学、東京大学の新望遠鏡計画へのご意見・ご提案を積極的に回収する場として第7回光赤外線天文学大学間連携ワークショップを開催しました。53名の参加者のうち、大学院生と学部生を合わせて15名が学生で、若手の研究者の活躍が目立つワークショップとなりました。 平成28年度はこの事業の最終年度であり、また来年度からの継続事業に向けての準備を行う年でもあります。研究成果を持ち寄り、本事業のまとめ・反省・総括を行って、次へ向けての議論も行いました。 このことを踏まえて、以下の5名の方に行って頂いた招待講演を含む27件の口頭講演と、5件のポスター発表、及び次年度へ向けての議論の時間がありました。 招待講演リスト 1. 光赤外線大学連携の取り組みについてのコメント: 観山正見(広島大学・神戸大学) 2. 重力波天体の検出について: 神田展行(大阪市立大学) 3. 重力波天体の光赤外線観測: 諸隈智貴(東京大学) 4. 突発天体天文学: 田中雅臣(国立天文台) 5. 大学間連携内の突発天体サーベイ: 酒向重行(東京大学)			

研究集会の成果	本研究会のセッションは、各サイトのまとめ報告、重力波天体、研究成果報告、教育プログラム報告、サイエンスレビュー、議論の順番で進みました。 「各サイトのまとめ報告」セッションでは、北大、埼玉大、東大、東工大、名大、国立天文台石垣島天文台、岡山天体物理観測所、兵庫県立大、鹿児島大、京大の各サイトでの、光赤外線大学間連携事業で行った活動の報告がありました。それぞれのサイトで行われた観測装置・環境の整備、実際に行われた観測や成果の概要、そして将来計画の報告が行われました。これを受けて、このセッションの最後には、招待講演として観山さんによってこれまでの取組についての講評と、今後への期待のコメントが語られました。これにより、各サイトの現状や将来構想についての共通認識ができました。 「重力波天体」と「サイエンスレビュー」のセッションでは、来年度からの継続事業のサイエンスの重点項目である重力波天体やその他の突発天体のレビューが神田さん、諸隈さん、田中さんの3件の招待講演でなされました。また、酒向さんの招待講演では、東大木曽観測所での広視野高速カメラを用いたサーベイ、それによる突発天体現象の発見や次期大学間連携内でのフォローアップ観測までのプロセスが話されました。これにより、次期大学間連携で行われるサイエンスについての知識が得られました。 「成果報告」セッションでは、ガンマ線バーストや超新星、X線連星について、合わせて5件の研究成果報告がありました。また、次期大学間連携へのニュートリノイベントのフォローアップ観測の提案や、カザフスタンのFessenkov Astrophysical Instituteの研究者からのサイト紹介もありました。国際的な連携も視野に入れた動きのきっかけになりました。 「教育プログラム報告」セッションでは、他大学での観測や装置開発教育についての3件の報告がありました。3件の大学間連携事業の一つの柱でもある、大学の垣根を超えた教育活動の意義が再認識されました。 最後の議論のセッションでは、これまでの発表や報告のまとめを行い、東大木曽観測所のサーベイ、東大TAO望遠鏡、京大3.8m望遠鏡が稼働しだす次期大学間連携で、どのようなサイエンスを狙い、どのような体制で動いていくのかなどについて議論が行われました。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	平成29年度からの次期大学間連携事業が採択され、本研究会はそのよい礎となりました。今後も本ワークショップは継続していく予定です。